

『国語に関する世論調査』の「慣用句等の意味や言い方」項目をめぐる言語規範意識

—— 調査者側の意識の変化を中心に

新野直哉

論文要旨

文化庁国語課が毎年行っている『国語に関する世論調査』のうち、「慣用句等の意味や言い方」項目に関する、調査者である国語課側の言語規範意識の変化について、平成22～令和3年度の調査を対象に論じた。国語課側による世論調査の報告記事では、問題にしているのはあくまで意味や言い方が「本来か非本来か」であって「正しいか誤りか」ではない、という姿勢が一貫している。さらに、最近になるほど、明らかに、「本来の意味／言い方である／ない」という断定を避けようという意識が強まってきている。そして、国語課関係者のメディアでの発言では、最近になるほど、メディアでの「本来・非本来」→「正・誤」という「変換」への不満・違和感と、何が「本来」なのか知ってもらっては望ましいがそちらにひき戻そうという意図はない、ということ強調するようになってきている。これは、調査結果が「変換」されてメディアで報じられることで「本来」の意味・言い方の勢力が強まることに対する、「国語に関する世論操作」「巧妙な矯正促進」といった言語研究者側からの批判が念頭にあってのことと考えられる。

キーワード【『国語に関する世論調査』、「慣用句等の意味や言い方」、文化庁国語課、言語規範意識、「本来」】

1 はじめに

筆者は、「誤用」に相当するものを中心とした近現代の言語変化について、変化そのものに関する記述的研究に加え、その変化が同時代の人々にどう受け止められたかという言語意識、中でも言語規範意識についても研究を行ってきた（新野（2011、2020）など）¹⁾。

そして、そのような研究に際し、文化庁国語課が平成7年度から行っている『国語に関する世論調査』（以下、単に「世論調査」とする）の結果をしばしば参照してきた。その中で、平成23年度の世論調査の設問や選択肢の問題点については新野（2013）で、その結果に関する新聞報道の問題点については新野（2014）で扱った。

その後も筆者は、世論調査の結果に注目してきた。そして、「誤用」に相当するものを含むような「慣用句等の意味や言い方」に関する調査の意図とその結果に関する、国語課側による報告記事やメディアでの発言に現れる言語規範意識、さらに調査結果を報じる記事に見

られる新聞の側の言語規範意識が次第に変化していることに気づいた。今回は、調査者である国語課側の意識の変化を中心に論じることとする。

平成21年度の世論調査には、このジャンルの問いがなかった。そこで、その翌年度の22年度から令和3年度までの12年間を対象として、現時点での調査・分析結果を示す。以下、平成(令和)〇年度の世論調査は単に「〇年度調査」と表す。30年度調査の次が元年度調査、ということになる。

世論調査の結果については、文化庁ウェブページ https://www.bunka.go.jp/tokei_haku_sho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/index.html に掲載されている、国語課編集の「報告書」(同内容の紙媒体では、非売品のいわゆる「白表紙」と、ぎょうせい刊の市販品がある)、さらにその概要をまとめた、PDF版『「平成(令和)〇年度国語に関する世論調査」の結果について』(以下、「結果の概要」とする)を利用した。

以下、引用中の { } 内、下線(「ママ」としたものは除く)は筆者による。また、人物の所属先や役職は当時のものである。

2 今回対象とする問いと項目

まず、今回対象とする問いとはどのようなものかについて確認しておく。

早川(2013)で、早川俊章・国語課長は、次のように述べる。

〔1〕 例年、本調査{=世論調査}の結果は、新聞、テレビ、雑誌等で、大きく取り上げられてきました。特に、慣用句などの言葉について、その意味や言い方を尋ねる問いには注目が集まります。これは、ある言葉について、本来の意味あるいは言い方と、世間で広がっていると思われる使用例を二つ示し、どちらを使っているかをお尋ねするもので、意味や語形の変化など、国語の現状を把握するための貴重なデータとなっています。また、近年使われ始め、定着しつつある語や表現についての意識を尋ねた問いへの関心も高いようです。

本稿で対象とする「慣用句等の意味や言い方」の問いとは、ここで挙げられた「慣用句などの言葉について、その意味や言い方を尋ねる問い」のことである。

本稿執筆時点で結果が発表済みの最新の調査である3年度調査の問いの題目は、「報告書」目次に従うと以下のようにになっている(以下、「問7」は「7.」のように表す)。

1. 国語への関心
2. 言葉や言葉の使い方について社会全般で課題があると思うか
3. 言葉や言葉の使い方について自分自身に課題があると思うか

4. 情報機器の普及で言葉や言葉の使い方が影響を受けると思うか
5. 言葉の使われ方の印象
6. 日本語がローマ字で書き表されているのを見ることあるか
7. 情報機器における日本語入力でのローマ字入力の使用
8. 日本語をローマ字で書き表すことあるか
9. どのローマ字表記を使うか
10. 気になる言葉（使うことあるか）
11. 気になる言葉（気になるか）
12. 慣用句等の意味
13. 慣用句等の言い方

このうち、「12」「13」は題目から「慣用句等の意味や言い方」の問いに相当するのは明らかであるが、これらは、ある語句について、「本来の」意味や言い方と「本来のものとは異なる」意味や言い方（以下、前者を「本来」、後者を「非本来」とする）を選択肢として挙げ、一方を選ばせるという形式、すなわち〔1〕の言う「ある言葉について、本来の意味あるいは言い方と、世間で広がっていると思われる使用例を二つ示し、どちらを使っているかをお尋ねする」という形式の問いである。

ほかの問いを見ると、「5」は、“人流”“黙食”“ブレイクスルー感染”等の「コロナ禍」関連の時事用語について、「この言葉をそのまま使うのがいい」「この言葉を使うなら、説明を付けたほうがいい」「この言葉は使わないで、ほかの言い方をしたほうがいい」という選択肢から一つを選ばせるものである。また、「10」「11」では、“ちがくて”“半端ない”“見える化”等の「若者語」あるいは「新語」と呼ばれるような事例について、使うことあるかどうか、さらにそれらが「気になる」かどうかが問われている。これらの問いも、言語規範意識に関係するところは小さくないが、〔1〕で言うところの「近年使われ始め、定着しつつある語や表現についての意識を尋ねた問い」ということになり、今回は対象としない。

同じような基準で、22～23年度の問いも検討した。その結果、「報告書」にある問いの題目に「慣用句（等）」という文言が入っているものに加え、以下のものは「慣用句等の意味や言い方」に関する問いであると考えた。

22年度「25. 言葉の意味」では“号泣する”“すべからく”等、23年度「22. 言葉の意味」では“にやける”“失笑する”等の、「日本語本」（一般向けの、日本語に関する本）等ではしばしば「誤用」が取り沙汰される事例について、「本来・非本来」の二種類の意味を挙げてどちらで使うかを尋ねている。

また、27年度「22. 言葉の言い方—どちらを使うか」も、“鳥肌が立つ”“こだわる”“悩

ましい”等のやはりよく知られた事例が取り上げられている。質問文は「どちらの言い方を使いますか」であるが、“鳥肌が立つ”を例にとると「(a) 余りのすばらしさに鳥肌が立った」 「(b) 余りの恐ろしさに鳥肌が立った」が選択肢で、事実上尋ねているのは「どのような意味で使うか」である。同じ 27 年度の「25. 慣用句等の意味」では、“琴線に触れる”を例にとると「(ア) 怒りを買ってしまうこと」「(イ) 感動や共鳴を与えること」のどちらの意味だと思うか、と尋ねている。“鳥肌が立つ”にしても、「(ア) 感動や興奮で肌がブツブツになること」「(イ) 寒さや恐怖で肌がブツブツになること」のどちらの意味だと思うか、のような形式でこの問いの項目にすることも可能であろう。

一方、23 年度「19. ふだんの言い方」には、「全然明るい」や“なにげに”のような、「意味や言い方」がしばしば議論の対象になってきた（そして筆者が新野（2011、2020）等で研究対象としてきた）項目が含まれ、「とても明るい」ということを、「全然明るい」と言う」のような例文を挙げて、そのような使い方をすることがあるかないかを問う、という形式である。また 28 年度「26. 聞いたこと、使ったことがある表現」では“心が折れる”“目が点になる”等の成句が取り上げられ、「聞いたこと・使ったことがあるかないか」が問われている。これらも研究者・非研究者双方が様々な言語規範意識を提示してきた事例で、ほかの年度にも同趣の問いは見られるが、3 年度の「5」「10」「11」同様の「近年使われ始め、定着しつつある語や表現」に関する問い（ただし、「全然明るい」は実際は〈とても明るい〉の意では使わない。新野（2011）参照）、ということで、今回は対象から除いた。さらに、「ら抜き言葉」「さ入れ言葉」や敬語・待遇表現についても同様の形式の問いが何度か出されているが、同様に「慣用句等」の問題とは言えないということで、やはり今回は対象としない。

以上のような検討の結果、今回の対象となる「慣用句等の意味や言い方」の問いと項目は、表 1 に示したものである。22～24 年度は「意味」「言い方」の問いは各 5 項目であったが、25 年度は「意味」のみで 6 項目になった。その後 26・27 年度は各 4 項目、28 年度以降は各 3 項目と、次第に項目数が減っている。

題目は 23 年度までは「慣用句」、24 年度以降は「慣用句等」と「等」がついているが、その中の項目による区別があるとは思えない。「慣用句」の定義は研究者により違いがあるが、〈複数の語が連結したもの〉という要素は必要条件と思われる。したがって、例えば 2 年度の「10」の 3 項目はいずれも「慣用句」ではないということになる。ここは何か別の名称に改めるべきではないかと思うが、この問題は今回は措いておく。

3 国語課による調査結果報告記事に見られる意識

まず、世論調査の結果について国語課側が報告する記事で、「慣用句等の意味や言い方」

表1 「慣用句等の意味や言い方」の問いと項目

年度	「慣用句等の意味」の問いと項目	「慣用句等の言い方」の問いと項目 (「本来」／「非本来」)
22	25. 言葉の意味 「情けは人のためならず」「雨模様」 「姑息」「すべからく」「号泣する」	26. 慣用句の認識と使用 「間が持てない／間が持たない」「古式ゆかしく／古式豊かに」 「寸暇を惜しんで／寸暇を惜しまず」「声を荒(あら)らげる／声を荒(あ)らげる」 「雪辱を果たす／雪辱を晴らす」
23	22. 言葉の意味 「煮え湯を飲まされる」「うがった見方をする」 「にやける」「失笑する」「割愛する」	23. 慣用句の認識と使用 「舌先三寸／口先三寸」「食指が動く／食指をそそられる」 「のべつまくなし／のべつまなし」「物議を醸す／物議を呼ぶ」 「二つ返事／一つ返事」
24	17. 慣用句等の意味 「役不足」「流れに棹さす」「気が置けない」 「潮時」「噴飯もの」	18. 慣用句等の言い方 「取り付く鳥がない／取り付く暇がない」 「押しも押されぬ／押しも押されぬ」「的を射る／的を得る」 「伝家の宝刀／天下の宝刀」 「怒り心頭に発する／怒り心頭に達する」
25	22. 慣用句等の意味 「他山の石」「世間ずれ」「煮詰まる」 「天地無用」「やぶさかでない」「まんじりともせず」	(なし)
26	24. 慣用句等の意味 「おもむろに」「枯れ木も山のにぎわい」 「小春日和」「天に唾する」	25. 慣用句等の言い方 「青田買い／青田刈り」「熱にうかされる／熱にうなされる」 「いやがうえにも／いやがおうにも」 「眉をひそめる／眉をしかめる」
27	22. 言葉の言い方—どちらを使うか 「鳥肌が立つ」「こだわる」「悩ましい」 「○○系」「○○まくる」「固まる」 25. 慣用句等の意味 「奇特」「確信犯」「琴線に触れる」 「名前負け」	26. 慣用句等の言い方 「あいきょうを振りまく／あいそ(う)を振りまく」 「そうは間屋が卸さない／そうは間屋が許さない」 「上を下への大騒ぎ／上や下への大騒ぎ」 「寝覚めが悪い／目覚めが悪い」
28	27. 慣用句等の意味 「さわり」「ぞっとしない」「知恵熱」	28. 慣用句等の言い方 「言葉を濁す／口を濁す」 「足をすくわれる／足下をすくわれる」 「存亡の機／存亡の危機」
29	17. 慣用句等の意味 「檄を飛ばす」「やおら」「なし崩し」	18. 慣用句等の言い方 「采配を振る／采配を振るう」 「溜飲を下げる／溜飲を晴らす」 「白羽の矢が立つ／白羽の矢が当たる」
30	17. 慣用句等の意味 「慥然」「御の字」「砂をかむよう」	18. 慣用句等の言い方 「天地神明に誓って／天地天命に誓って」 「舌の根の乾かぬうちに／舌の先の乾かぬうちに」 「論陣を張る／論戦を張る」
元	12. 慣用句等の意味 「手をこまねく」「敷居が高い」 「浮足立つ」	13. 慣用句等の言い方 「新規まき直し／新規まき返し」 「雪辱を果たす／雪辱を晴らす」 「噛んで含めるように／噛んで含むように」
2	10. 慣用句等の意味 「がぜん」「破天荒」「すべからく」	11. 慣用句等の言い方 「明るみに出る／明るみになる」 「寸暇を惜しんで／寸暇を惜しまず」 「二つ返事／一つ返事」
3	12. 慣用句等の意味 「揚げ足を取る」「姑息」「割愛する」	13. 慣用句等の言い方 「脚光を浴びる／脚光を集める」 「声を荒(あら)らげる／声を荒(あ)らげる」 「のべつまくなし／のべつまなし」

の問いの「本来」「非本来」がどう表現され、そこにどのような言語規範意識が現れているかについて見ていく。

3.1 「結果の概要」

まず、文化庁ウェブページ掲載の「結果の概要」に見られる「本来」「非本来」の表現について見る。

22年度の「言葉の意味」では、冒頭の破線で囲んだ見出しの部分に太字で次のようにある。

〔2〕「雨模様」「姑息」「号泣する」は本来とは違う意味で使われることが多い。「情けは人のためならず」「すべからく」も、本来の意味で使う人は半数に満たない。その次には、全体の「まとめ」の形で、次のようにある。

〔3〕五つの言葉を挙げて、どの意味で使っているかを尋ねた。辞書等で本来の意味とされるものに下線を付け、また、グラフ中では——の線で示した。

今回尋ねた五つの言葉のうち、(2)「雨模様」、(3)「姑息」、(5)「号泣する」は、本来の意味ではない方が多く選択されるという結果となった。(1)「情けは人のためならず」、(4)「すべからく」では、本来の意味と本来とは違う意味とで、選択した人の割合の差が小さい。

ここまでは、「本来」については「本来の意味とされるもの」と「本来の意味」、「非本来」については「本来とは違う意味」と「本来の意味ではない方」が混在している。その後各項目の結果を紹介する中では、

〔4〕{「号泣する」の結果は} 本来の意味とされる (ア)「「大声を上げて泣く」という意味」と答えた人が3割台半ば、本来の意味ではない (イ)「「激しく泣く」という意味」と答えた人が4割台後半となった。

のように、「本来」については「本来の意味とされる」、「非本来」については「本来の意味ではない」としている。

同じ22年度の「慣用句の認識と使用」²⁾でも、冒頭の破線で囲んだ見出しの部分に太字で

〔5〕 本来の言い方「間が持てない」「声を荒(あら)らげる」「寸暇を惜しんで」を使うのは少数派

とある。その後は、「本来」については「本来の言い方とされる」と「本来の言い方である」が混在、「非本来」については「本来の言い方ではない」としている。

このような、「本来」では「本来の意味／言い方」に「とされる」のつく形とつかない形が混在し、「非本来」では「とされる」のつかない形のみ、という状況は24年度まで続く。

25年度になると、「非本来」も「本来の意味ではない」と「本来とは違う意味とされる」の混在になる(この年「言い方」の問いはなし)。そして、26年度には「本来」が「本来の

意味／言い方とされ(てい)る」の形のみになり³⁾、「非本来」も2年遅れて28年度には「本来の意味とは違うとされる」「本来の言い方とされていない」のみとなる。この状況は30年度まで続く。さらに元年度以降は、「本来」は「とされ(てい)る」が「とされてきた」へと、「非本来」は「本来の意味／言い方とされてきたものとは異なる」へと変わっている。

また、22年度から、「意味」「言い方」それぞれの冒頭に一か所だけ「辞書等で本来の意味／言い方とされる」という表現が見られたが、26年度からは「辞書等で主に本来の意味／言い方とされる」と「主に」がつく形になった。そして元年度以降、冒頭以外でも「辞書等で」を使った個所が見られるようになるが、「主に」はある場合とない場合がある。さらに「非本来」についても「本来の意味／言い方とされてきたものとは異なる」の前に「辞書等で」がつく個所も見られるようになるが、こちらでは「主に」がつく場合はない。

3.2 『教育委員会月報』

文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課編『教育委員会月報』（第一法規）には、25年度以降の世論調査の結果に関する、「文化庁国語課」（28年度までは「文化庁文化庁国語課」）名義での報告「平成（令和）〇年度「国語に関する世論調査」の結果について」が掲載されている。26年度以降は「慣用句等の意味・言い方について」という節があり、調査結果を表で示している。その表の体裁を説明する文言が、表2のように変化している。なお、25年度については「慣用句等の意味について」として結果を表で示し、「ゴシック体太字が本来の意味です」と注記するのみである。

この『教育委員会月報』は令和2年度をもって紙媒体での刊行を終了し、文部科学省ウェブページ上の「電子ブック」となったが、2年度調査の結果は取り上げていない。その代りと思われるのが、町田互・国語調査官による町田（2022）である⁴⁾。この記事の「7 慣用句等の意味・言い方」の節にある「10」「11」の結果の表の説明を2年度のデータとして示した。元年度調査の欄の記述と比べると、文末が常体から敬体になったただけである。翌3年度調査についても町田（2023）が発表されているが、ここでは表はなく、本文中でも「慣用句等（「姑息（こそく）」「割愛する」「揚げ足を取る」等）についても尋ねた」とあるのみで結果には言及しない。その代り、『教育委員会月報』での扱いが復活した。

表2で「本来」「非本来」の表現を確認すると、25年度は「本来の意味」、26・27年度は第一文が「本来の意味・言い方とされている」で第二文は「本来の意味・言い方（ではない方）」、28年度は第一文・第二文ともに「本来の意味・言い方（ではない）とされ(てい)る」となっている。そして29年度からは「辞書等で主に」が、第一文に挿入された。さらに元年度以降は第二文にも「辞書等で」が挿入されたうえ、第一文・第二文ともに「本来の意味・言い方とされてきた」と「され(てい)る」から「されてきた」に文末が変わっている。

また28年度以降は、この後に個別の項目に関する解説があり、そこでは30年度までは「本

表 2 『教育委員会月報』「平成 (令和) ○年度「国語に関する世論調査」の結果について」
(2 年度のみ、町田 (2022)) の表の体裁を説明する文言 * 太字・下線ママ。

年度	掲載号	文言 (掲載ページ)
25	66(9)	ゴシック体太字が本来の意味です (53)
26	67(9)	表中のゴシック体は本来の意味・言い方とされている選択肢です。また、白抜き数字は、本来の意味・言い方ではない方を選択した割合が、本来の意味・言い方を選択した割合より高いものです。(61)
27	68(8)	表中のゴシック体は本来の意味・言い方とされている選択肢である。また、白抜き数字は、本来の意味・言い方ではない方を選択した割合が、本来の意味・言い方を選択した割合より高いものとなっている。(61)
28	69(8)	表中のゴシック体は本来の意味・言い方とされている選択肢である。また、白抜き数字は、本来の意味・言い方ではないとされる方を選択した割合が、本来の意味・言い方とされる方を選択した割合より高いものである。(77)
29	70(8)	表中のゴシック体は辞書等で主に本来の意味・言い方とされている選択肢である。また、白抜き数字は、本来の意味・言い方ではないとされる方を選択した割合が、本来の意味・言い方とされる方を選択した割合より高いものである。(54)
30	71(9)	同上 (69)
元	72(9)	表中の太字は、辞書等で主に本来の意味・言い方とされてきた選択肢である。また、白抜きの数字は、辞書等で本来の意味・言い方とされてきた方を選択した割合より、そうでない方を選択した割合が 5 ポイント以上高いものである。(54)
2	『教育科学 国語教育』 64(3)	表中の太字は、辞書等で主に本来の意味・言い方とされてきた選択肢です。また、白抜きの数字は、辞書等で本来の意味・言い方とされてきた方を選択した割合より、そうでない方を選択した割合が 5 ポイント以上高いものです。(85)
3	74(9)	元年度と同じ (21)

来の意味／言い方とされ(てい)る」、元年度は「辞書等で本来の意味／言い方とされてきた」と、こちらでも「辞書等で」が加わり、文末が「されてきた」と変わっている。

2 年度は「辞書等で本来の意味／言い方／意味・言い方とされてきた」と「辞書等で」がない「本来の言い方とされていない」が併用されている。3 年度は元年度と同様「辞書等で本来の意味／言い方とされてきた」とする。

3.3 考察

ここまで見てきた二種類の資料の調査結果からどのような国語課側の意識がわかるであろうか。まず、すべて「本来の意味／言い方か否か」という視点からの記述であり、「本来」を「正」、「非本来」を「誤」とした記述はなかった⁵⁾。そして、「本来」・「非本来」とともに「とされ(てい)る」のつく形のみになったのが 28 年度、文末が「とされてきた」となったのが元年度という点は両資料で共通している。「辞書等で」については『教育委員会月報』の方が 7 年遅れて 29 年度から挿入されている。

「本来」「非本来」に「とされ(てい)る」がつくことで、「本当に「本来」なのか、あるいは「非本来」なのかはわからないが、とにかくそう言われている」というスタンスになる。さらにそれが「とされてきた」と変わると、「今まではそうだったが、今後もずっとそうかはわからない」というニュアンスが加わる。また、「辞書等で」を冠すると「本当のところはともかく、少なくとも辞書や「日本語本」等ではそうなっている」というある種の限定付きとなり、「辞書等で主に」となると「辞書や「日本語本」等のすべてというわけではなく、あくまでそのうちの多数派でそうなっている」とさらに限定が狭まる。

この2種類の資料に見られる国語課側の言語規範意識は、「正しいか、誤りか」を問わないだけでなく、明らかに、「本来の意味／言い方か否か」についても断定を避ける方向へと変化しているのである。

4 国語課側の調査の意図

「慣用句等の意味や言い方」の調査を行う側の意図・意識については、言語研究者・辞書編集者の分析と、当事者である国語課関係者のコメントとがある。ここでは新野(2013、2014)で取り上げたものを含む、筆者の管見に入った23年度以降のものを見ていく。

4.1 言語研究者・辞書編集者の分析

「慣用句等の意味や言い方」の調査とその結果の扱い方に対する言語研究者による分析としては、まず大場(2013)がある。大場は、19年度調査の結果について自身がインタビューを受けたテレビのニュース番組において、「世論調査が慣用句などの正誤判断のみを扱っている」というステレオタイプが形成された、と述べる。この、世論調査の問いの中でも「慣用句等の意味や言い方」がメディアで特に大きく(「のみ」とまではいかなくとも)扱われる、という傾向について、様々な見解が示されている。

勝田(2014)は、“足をすくわれる”かそれとも“足下をすくわれる”か、という問題について何種類もの国語辞典を利用しつつ考察を行う中で、19年度調査でのこの項目の調査結果も参照している。そして、

〔6〕文化庁が「本来の言い方」と「そうでない言い方」に二分して調査を行って結果報告したことで、「足をすくわれる」=本来の言い方、という“お墨付き”が国の機関から与えられた格好になったと考えてよいでしょう。(30-31)

と、世論調査にかなりの権威・影響力があるとの見方を示す。そして、「メディアによる操作」という見出しのもとに、

〔7〕例えば新聞が文化庁の調査結果を記事にする際、「正誤」という単純な図式にして紹介するのは、好ましくはないけれども仕方のないことなのかもしれません。

(99)

として、19年度調査の結果を報じる新聞記事に「正しい答え」「正答できた」といった表現が見られることを挙げ、次のように述べる。

〔8〕 これでは、調査に協力した人は記事を読んでビックリしちゃいますよね。調査の
はずが、「知識の有無をテストされていたの!?!しかも結果にあきれているらしい」
と。(100)

大場と勝田はともに世論調査の結果を報じる側の姿勢を問題にするが、世論調査を行う側の意図については特に論じていない。

それに対し、山田(2013:260-261)は世論調査についてこう述べる。

〔9〕 ここ何年かは、古い意味と新しい意味とがせめぎ合う例を取り上げて、古い意味
へと教育を誘導しようとしている印象を受けます。{中略} さらに巧妙にも、この
調査は、「正しい意味」ということばを使いません。あくまで「本来の意味」ですよ、
と言ってはいます。ただ、これがマスコミというフィルターに掛けられると、「本
来の」ということばは「正しい」へと変換され、こんなに間違っ使われているの
だから直さなければならぬと翻訳されていきます。まさに、公的なことば咎め
ず。

ここで指摘される、「本来・非本来」→「正・誤」という「変換」がマスコミで行われる
ことについて、山田はその後、山田(2021:24)ではこう述べている。

〔10〕 文化庁が調査をし「世論」を公表すれば、それが「正しい意味」という表現を避
けて「本来の意味」と中立めかしても、マスコミは「間違っ表現が増えている」
と見出しに書き立てる。それによって国語教師は「本来の意味」を「正しい意味」
として教えることになり、結果として「正用」が増えていくことにつながるの
である。国家を挙げての巧妙な矯正促進が行われている。

マスコミの「変換」は世論調査を行う側も想定済みであり、それが国語教育に影響を与
えて「結果として「正用」が増えていく」、としてこれを「国家を挙げての巧妙な矯正促進」
と批判的にとらえている。

同様のとらえ方をするのが、森(2014)である。町田(2022、2023)を掲載したのと同じ
国語教育専門誌での、「「国語に関する世論調査」と国語教育の課題」と題した7件の文章か
ら成る小特集のうちの1件であるが、ほかの6件が調査結果(の一部)の分析と授業での活
用法を中心に述べているのに対し、森は全く視点が異なる。冒頭から

〔11〕 本調査は新聞やニュースなどマスコミ報道でも取り上げられることが多いが、そ
の中でも注目を集めるのが「誤用」に関する調査である。懸念すべきは、この誤用
を選ぶ際に、いかにも間違いそうな言葉の意味や慣用句を無理に探し出し、マス

ミ受けを狙いすぎているのではないかという点である。それでは本末転倒である。と、「非本来」を「誤用」と言い換えたうえで批判的な姿勢を鮮明にする。さらに、「現状についての調査ではなく、むしろ現状を矯正したり規範を作り出したりする調査になってしまっているのではないかと疑問を呈し、再度の調査で前回より「本来」の回答率が上がった「言葉の意味や慣用句」の項目に注目する。そして、

〔12〕 日常の言語使用としては明らかに頻度が低いと思われるこれらの言葉の意味や慣用句の理解が、自然発生的に向上するというのは、実に不可解である。

として、「本調査に取り上げられたために、マスコミやネットなどの影響で調査対象者の一部が無理に認識を改めた」という可能性を提示し、その当否は「少なくとも今回の調査結果からは検証不可能」としつつも、次のように締めくくる。

〔13〕 仮に当たっているとすれば、それは調査目的が妥当ではないことを示すだけでなく、税金を使った「国語に関する世論操作」と非難される可能性すらある。

一方、元辞書編集者の増井元は、増井（2013：39-41）で、この問題に触れる。

〔14〕 {世論調査の} 調査結果はマスコミでも取り上げられ、大勢の人が誤って理解・使用していることばについて、どの程度の人が誤っているのか、年代別にみるとどうか、などが大きく扱われます。挙げられることばは以前から誤用の多いことが報告されていた語が中心で、{中略} ことばによっては七〇%を超える人が誤った使い方をしていると言うのです。

ここで増井は、「本来・非本来」→「正・誤」という「変換」を何度も行い、さらに

〔15〕 考えてみれば、文化庁の「世論調査」自体が、「今後の施策の参考」と言いながら、深謀遠慮の上に立った国語施策そのものではないかと思われます。マスコミの報道は調査結果を客観的に報じているようで、その実、「ことばの乱れはここまで来た」の大合唱です。「美しい日本語を守る」上で、これほど効果的なキャンペーン、と言って悪ければ啓蒙運動は他にないでしょう。あまりフェアでないようにも感じるのですが、それでも、私はこのキャンペーンに半分賛成するものです。

と、世論調査がマスコミの「変換」を念頭に置いた「深謀遠慮の上に立った国語施策」、「美しい日本語を守る」ための「啓蒙運動」ではないかと推測したうえで、「あまりフェアでないようにも感じる」ものの「半分賛成する」という立場を表明している。

そして、同じく辞書編集に長く携わった神永暁の神永（2015）に注目したい。同書で神永は、世論調査の結果を繰り返して紹介しており、その際基本的に「本来の～」という表現を使いながらも、ところどころで「非本来」を「間違った言い方」、「従来なかった誤った意味」のように呼んでいる⁶⁾。そして、過去3回調査されている“気が置けない”で「本来の意味」の回答率が40%台前半で横ばい状態であることに對し、

[16] これほどマスコミなどでも誤った言い方の代表であると紹介されることが多いことばであるにも関わらず、ほとんど変化がないというのはどうしたことなのであるうか。

ことばの使い方を扱ったクイズ番組はけっこうあり、その中でこの「気が置けない」も問題として出題されることが多いと思う。だが、テレビを見ている人は「へー そうなんだ」と思っただけで終わってしまうのだろうか。その場で自分はどのような意味で使っていたかという確認まではしないのであろうか。(74)

と嘆く(新野(2020:128)参照)。ここからは、森が「世論操作」と批判した「本調査に取り上げられたために、マスコミやネットなどの影響で調査対象者の一部が無理に認識を改め」ることを当然視し、むしろそれに期待していることが感じられる⁷⁾。

以上見てきたように、世論調査の結果がメディアで「本来・非本来」→「正・誤」という、山田の言うところの「変換」を経たうえで大きく報じられていること、そしてそれが各方面に影響を与えた結果「本来」の回答率の向上が起き(てい)ることをどう評価するかについて、態度が大きく分かれている。これは、各人の言語規範意識の反映にほかならない。

4.2 国語課関係者の発言

次に、「慣用句等の意味や言い方」の調査とその結果に関する、メディアでの国語課関係者の実名コメントから、どのような言語規範意識が感じられるかを見ていく。

今回の調査期間以前では、20年度調査の結果についての座談会で、「慣用句等の意味や言い方」の問いで「非本来」の回答が目立つことに関するやり取りの最後に、匂坂克久・国語課長が次のように述べている。

[17] 報道発表などをすると、特に慣用句の部分をテレビなどでよく取り上げていただいて、どっちがマル、どっちがバツとか、短絡的といいますか……。{中略} そういう報道をされるのですが、それはそれとして、言葉に注目していただくという一つのきっかけになるという面もあると思いますので、前向きに考えていきたいと思っていますところ。(「情報化時代の言語生活—平成二〇年度国語に関する世論調査」の結果から)『文化庁月報』2009.10:14)

ここでは、「本来・非本来」を「マル・バツ」と「変換」したうえで報じるメディアの姿勢を「短絡的」とはしつつも、事実上容認するような姿勢である。

それでは、今回対象とした期間では、国語課関係者はどのように語っているのか。

まず、『東京新聞』2012.9.25朝刊の「こちら特報部」は、23年度調査の結果を取り上げの中で、武田康宏・国語調査官の発言を紹介している。

[18] 武田調査官は「実は、この質問 {=「慣用句や言葉の誤用」についての質問} は

調査よりも、国語に関心を持ってもらうための意味合いが強い」と明かす。{中略} 武田調査官は「言葉は生き物で、変わっていく。多数派になれば、誤りとは言いにくい。また、国による言語統制と取られてはまずいので、文化庁は『誤用』という表現を使いません」と指摘。この種の「誤用」のような言葉の変化を「間違ったこと」とは認めていないということだ。

また、早川（2013）は前掲の〔1〕に続き、以下のように述べる。

〔19〕 本調査をきっかけにして、国民の皆さんに、ふだんは何気なく使っている言葉やその意味について調べ直したり、家族や親しい人たちと話題にしたりするような機会を持っていただき、それらを通じて、国語への興味や関心を呼び起こし、ひいては、御自身の言葉遣いなどを見直すような機会としてもらおうというのも、この調査の重要な目的となっています。

そして、世論調査の結果についてさらに説明を加えた書籍である文化庁国語課（2015）の「はじめに」で、岸本織江・国語課長は、次のように述べる。

〔20〕 この本を読むとお気づきになると思いますが、文化庁国語課では、言葉の意味について「正しい」「誤り」といった判断をせず、代わりに、「本来の意味」「本来とは違う言い方」といった言い方にとどめています。言葉の正誤を軽々しく決めることはできないと考えるからです。{中略} 国語課が「国語に関する世論調査」で言葉の意味や使い方の揺れを繰り返し取り上げてきたのは、本来の意味を知っていただくことで、皆さんが普段使っている言葉を見直すきっかけとしていただき、人との伝え合いを、よりの確なものとしていただくためです。（5-6）

さらに、北原（2017）掲載の北原保雄との対談で、鈴木仁也・国語調査官は次のように述べている。

〔21〕 「役不足」「煮詰まる」「情けは人のためならず」。この三つの表現については、全く正反対の意味で理解されている方が、かなりの数いらっしゃるという結果が出ています。言葉がこういう状況にあるということを多くの方に知ってもらい、使う時に注意をして、誤解を防げたらいいと思うんですが、マスコミの報道では、どうもそこまでの言及は少ないように感じることがあります「正解か？それとも不正解か？」といった二択クイズのような方向で紹介していることが多いんです。{中略} この世論調査はテレビやラジオの番組でも取り上げられやすいですし、学校現場でも素材として使いやすい。その影響か、「役不足」や「流れに棹さす」などは、本来の意味を理解している人が増えたといった経年調査の結果も見られています。{中略} 経年で行える調査ということで、言葉の本来の使い方気づききっかけにもなっています。（166-168）

鈴木調査官は前掲の勾坂課長同様、メディアの「正解か？それとも不正解か？」という報

道姿勢に言及し、それへの違和感を示している。その一方、マスコミや教育現場で扱われることで「本来の意味を理解している人が増え」ることを成果として紹介している⁸⁾。

以上のように、「慣用句等の意味や言い方」の問いを出す意図として、「調査よりも、国語に関心を持ってもらう」（武田）、「国語への興味や関心呼び起こし、ひいては、御自身の言葉遣いなどを見直すような機会としてもらおう」（早川）、「本来の意味を知っていただくことで、皆さんが普段使っている言葉を見直すきっかけとしていただき」（岸本）、「言葉の本来の使い方に気づききっかけ」（鈴木）ということが繰り返して示されている。

そして、30 年度調査の結果が発表されたのち、国語課関係者が登場する記事が 2 件見られた。

まず、『毎日新聞』2019. 12. 16 朝刊「校閲発：春夏秋冬」に、前出の武田調査官へのインタビュー記事が掲載された。インタビュアーである校閲担当記者が「慣用句に関する問いでは、記事の見出しで「○」「×」と決めつけないよう校閲も気をつけています」と述べた⁹⁾のに対し、武田調査官は、

[22] 記者発表で「本来の意味から派生した使われ方も誤りとまでは言えない」と強調しており、報道での扱われ方も変わってきたと思います。面白おかしくやろうとしているだけと誤解されないようにしたいですし、正誤を問題にしているのではないということも伝えたいですね。

とメディアでの「変換」を牽制し、7 年前の[18]に続いて「正誤」を問題にするというスタンスではないことを強調する。

さらに、再調査で「本来」の回答率が増える項目については、次のように述べる。

[23] コミュニケーションでの食い違いに注意喚起するという点では意味があると思いますが、一方で、言葉が時代とともに変化しているのなら、流れを引き戻していいのかという問題があるかもしれません。ただ、本当に変化するのは、調査が報道されたところで止められないということも感じています。

そして、同時期の『週刊ダイヤモンド』2019. 12. 21 号に掲載された、武田調査官と小沢貴雄・国語課専門職へのインタビュー記事「言葉の変遷を残していく」（66-67）では、さらに踏み込んだ発言が出ている（両者のうちどちらの発言かは示されていない）。

[24] 私たちは「正誤」で割り切らないように気を付けており、最近は特にそのことを強調するようにしています。ニュースやクイズ番組では、調査内容を単純化して「○×」で取り上げたりしますが、言葉の意味は正誤を付けられるものではありません。

また、「あえて言葉の元の意味を知らせる必要はあるのか、言葉の変化を逆行させることになる」と、調査自体に疑問を持つ人もいます」という問いかけに対しては、

〔25〕 当然、一理あると思います。「言葉の意味が変化していく段階」を捉えて公表することで、元の意味に戻る「アナウンス効果」も起こり得るかもしれません。としたうえで、「コミュニケーションの齟齬が起らないよう、どちらの意味も知っておいてもらうことが大事」とし、さらにこう述べる。

〔26〕 言葉の変化は、調査の有無にかかわらず、押しとどめられるものではありません。{中略} もちろん、面白おかしく調査して「こんなに変わっているんですよ」というだけの調査にならないよう、また、言葉の自然な変化を妨げることにならないよう、今後も細心の注意を払いたいと思います。

この2件の記事では、〔17〕や〔21〕で述べられた、「本来・非本来」→「正・誤」というメディアの「変換」への違和感が改めて明確に示されている。さらに、〔25〕では、〔21〕では成果として紹介していた「本来の意味を理解している人が増え」ることに対する、「言葉の変化を逆行させることになる」という批判を「一理ある」と受け止め、〔26〕では「言葉の自然な変化を妨げることにならないよう、今後も細心の注意を払いたい」と明言している。

さらに、一般向けメディアではないが、雑誌『日本語学』の世論調査に関する特集の中の一冊である武田（2021）では、「報告書」に掲げる世論調査の目的に、23年度から「国民の国語に関する興味・関心を喚起する」という一節が加わっていることを述べる。それに関し、「メディアでは、いわゆる若者言葉などの新語に関する意識や、慣用句等の意味や言い方が取り上げられる事が多く、「特に慣用句等の意味については{中略} 報道各社からも定番の問いとして期待されている面がある」とする。そして、終盤では、「本調査に関する今後の課題」の一つとして「正誤の問題として扱われやすい面の改善」を挙げ、次のように述べる。

〔27〕 本調査では、慣用句等の意味や言い方についての問いがほぼ毎年取り上げられてきた。{中略} 記者発表等では、辞書にあるものが「本来の意味とされている」として示される一方で、正誤を問うものではないことが例年強調されてきた。しかし、報道においては、○（マル）か×（バツ）かで示されることが多く、その後のウェブ上での反応などにも一方を排除するような書き方を見ることがある。（13）

〔28〕 本調査は、円滑なコミュニケーションの実現に寄与することを目指しているものの、言葉の正誤を定めたり意味を統一しようとしたりするものではない。その点を誤解なく伝えていくことも課題の一つである。（14）

国語課側としてはあくまで「本来・非本来」の立場であり、メディアの「正・誤」への「変換」は不本意であること、「意味を統一」する——つまり「ゆれ」をなくして「本来」に一本化させるという意図はないことを改めて強調している。

そして、3年度調査の結果発表後にも、『読売新聞』2022. 10. 30 東京朝刊「あすへの考」に、武田調査官の発言が掲載されている。ここでも、

[29] 年長者は「枕草子」の時代から若者の言葉遣いに眉をひそめてきました。そこは昔も今も変わりません。ただ、それぞれの言葉や意味について、「良い・悪い」とか「正しい・誤り」と仕分けるのは国のすべき仕事ではないと考えています。{中略}もちろん、気を付けるべき変化もあります。例えば「役不足」という言葉は、本人の力量より役目が「軽すぎる」と本来の意味で理解している人(2013年41.6%)と、反対の「重すぎる」と理解している人(同51.0%)がいます。つまり、褒めたつもりで使った言葉が相手を怒らせることになるかもしれません。このように、コミュニケーションの妨げになるものは注意して用いるべきでしょう。

と、「正誤」を問うのではなく、「コミュニケーションの成立」を重視していることを述べている。

ここで例に挙げている“役不足”については、さらに、

[30] 先の「役不足」の例で、さらにさかのぼった2002年の調査では、本来の意味である、本人の力量より役目が「軽すぎる」を選んだ人は27.6%でした。これが13年には41.6%に増えたということは、調査結果が知られることで国民のみなさんが関心を持ってくれたからかもしれません。

と、「元の意味に戻る「アナウンス効果」」([25])が起きたことを、国民が国語に関心を持った結果、として紹介している¹⁰⁾。そして、記事の最後はこう締めくくられている。

[31] {世論調査が} 相手や場面にふさわしい言葉を選ぶ大切さを再確認しつつ、「自分とは違う考え方もあるんだ」とか「若い人もなかなか面白い言葉を使うな」と前向きに捉え、他の人への寛容さを取り戻すきっかけになればと願っています。{中略}意味のすれ違いに気付いたときは、「もしかしたら、あなたが言っている『役不足』と私が思っている『役不足』、違っているかもしれませんね」と伝えてみてください。コミュニケーションがより深まるはずです。

この記事は、[29]や[31]からもわかるとおり、「若い世代の言葉＝(「正誤」はともかく)本来のものから変化した言葉」という中高年層の認識を前提に論じている。そのようなケースが多いのは確かであるが、“役不足”はその典型例とは言えない¹¹⁾。

以上見てきたように、近年になるほど、「慣用句等の意味や言い方」の調査がメディアで大きく取り上げられることを十分意識してはいるが、そこで「正誤」を問うものと扱われるのは不本意であること、「本来」の意味・言い方を知ってもらうことは望ましいが、そちらに引き戻そうという意図はないことが強調されている。ここからは、「国語に関する世論操作」(森)・「国家を挙げての巧妙な矯正促進」(山田)といった批判的な意見を国語課側は十分に認識していることがわかる。

筆者は新野(2014:40)で、「慣用句等の意味や言い方」の調査について、

[32] 「これらの項目の調査は、国が「間違い言葉」の氾濫を国民に警告し、それを矯正・撲滅するために行っている」と考えている国民も少なくないのではなかろうか。と述べたが、国民にそのように受け取られることを避けたい、という明確な意図が感じられる。

5 おわりに

本稿で述べてきたことをまとめる。平成 22 年度以降の「慣用句等の意味や言い方」の問いをめぐる言語規範意識については、以下のようなことがわかった。

まず、言語研究者・辞書編集側では、この調査の結果がメディアで「本来・非本来」→「正・誤」と「変換」されて報じられることで「本来」の意味・言い方の勢力が強まることについて、「世論操作」「巧妙な矯正促進」と批判的にとらえる森や山田から、「半分賛成」の増井、当然視し期待する神永まで賛否の立場が分かれる。

そして、調査者である国語課側においては、問題にしているのはあくまで「本来・非本来」であって「正・誤」ではない、という主張がこの期間中一貫している。さらに、「3」で見た世論調査の報告記事では、最近になるほど、明らかに、「本来の意味／言い方である／ない」という断定を避けようという意識が強まってきている。

そして、「4.2」で見た国語課関係者のメディアでの発言では、このジャンルの問いのメディアでの大きな扱いがある程度（あるいは相当程度）意識していることは認めつつ、最近になるほど、メディアでの「変換」への違和感と、何が「本来」なのか知ってもらうのは望ましいがそちらにひき戻そうという意図はない、ということを強調するようになった。これは、森や山田のような言語研究者側からの批判が念頭にあってのことと考えられる。

今回、新聞に掲載された国語課関係者の意識についても取り上げた。それでは、当の新聞各紙は、毎年、世論調査の結果を報じる記事の中で、この「慣用句等の意味や言い方」の調査結果をどのように扱い、どのような言語規範意識を示してきたのか。これについては別稿で論じたい。

注

- 1) 筆者は、カギカッコ付きの「誤用」を、〈辞書や「日本語本」等で、「このような意味（用法・形式）で使うのは誤りである」とされているなどして、「誤りである」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方〉という意味で使う（新野（2020：2）参照）。また、「言語規範意識」とは、〈個別的な言語形式・言語使用・言語行動、あるいは言語一般・日本語一般に関する、「正しいか・誤りか」「使ってよいか・使うべきでないか」という問題をめぐる意識〉と定義する。新野（2020：1-14）参照。

- 2) 「結果の概要」では「慣用句等の～」となっている。
- 3) この年度のみ、「本来の言い方」とあるべき箇所のうち2箇所が「本来の使い方」となっている。
- 4) 町田(2022、2023)が掲載された雑誌にはこれ以前も国語課職員による世論調査の結果を紹介する記事があるが、前年度までは「慣用句等の意味や言い方」の問いの結果は取り上げなかった。
- 5) 今回の対象期間以前に遡ると、14年度調査の「結果の概要」に相当する「平成14年度「国語に関する世論調査」の結果について」で、「15. 慣用句等の意味の理解」の結果について「「役不足」「確信犯」「流れに棹さす」は約6割が意味を誤って理解」と「誤って」を一度だけ使っている。
- 6) その後の神永(2018)でも、「非本来」について「間違っていて覚えている」、「誤用」と呼んだ箇所がある。
- 7) 神永は、ここでさらにこう述べる。

[33] 文化庁が行っているこのような調査は確かに重要であると思う。だが、こうなるとただ結果を知るだけでいいのだからかという気がしないでもない。{中略}単にことばは変化するものであると割り切ってしまうのではなく、日本語の将来をどうするべきなのか、そろそろ考えるべき時期なのではないかと思うのである。(74-75)

神永はここで、「文化庁ひいては国は、ただ調査して客観的な姿勢でその結果を知らせるだけでなく、「日本語の将来」のために、「誤った」回答の比率を減らすような具体策を取るべき時期である」ということを言いたいように筆者には読める。これもまた賛否の分かれる意見である。

- 8) なお、北原は、この鈴木調査官との対談では、「言葉に「正しい／正しくない」はなく、あくまで「本来の使い方ではない」言葉があるだけです」(167)と発言しているが、同書の他の箇所でも世論調査の結果を紹介する際は、「六割近い人が間違っている」、「正しい意味を理解している人はわずか一九・七%です」のように、「本来・非本来」→「正・誤」という「変換」を何度か行っている。
- 9) ただし、30年度調査の結果を報じる『毎日』の同年10.30付の東京本社版朝刊の記事(縮刷版による)の見出しでは、「国語世論調査 愾然 本来の意味は? 「腹を立てている」56% ○「失望しぼんやり」28%と、「本来」の意味に「○」がついている。
- 10) ただ、「役不足」についてはこの2回(14年度と24年度)の間に18年度でも調査されており、14年度から18年度にかけては、12~13ポイント「本来」の数字が増えて「非本来」のそれが減ったものの、18年度から24年度にかけては両者とも数字はほぼ横ばいになっている。
- 11) この語の24年度(2013年実施)の調査結果を世代別に見ると、10代(16~19歳)では「本来・非本来」の回答率が同ポイントで並んでおり、20代でも「非本来」が3ポイント強上回る程度なのに、50代では約20ポイント、60代以上でも約10ポイント「非本来」が上回っている。つまり、高齢層の方が「本来」の回答が劣勢なのである。この結果から考えると、この語に関して世代間で「意味のすれ違い」が起きた場合、「本来の意味」を知らないのは若年層ではなく高齢層である可能性の方が高い、ということになる。

参考文献

- 大場美和子(2013)「取材の談話とテレビニュースの談話の比較—「国語に関する世論調査」に対する専門家の解説の再構成のプロセス」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』16:77-101 広島女学院大学
- 勝田耕起(2014)『国語辞典女子—今日から始める日本語研究』フェリス女学院大学
- 神永暁(2015)『悩ましい国語辞典—辞書編集者だけが知っていることばの深層』時事通信出版局

- 神永暁 (2018) 『微妙におかしな日本語—ことばの結びつきの正解・不正解』 草思社
- 北原保雄 (2017) 『じっくりこない日本語』 小学館
- 武田康宏 (2021) 「『国語に関する世論調査』とは何か—国語施策の立案と興味・関心の喚起を目的として」『日本語学』40(2)：4-15 明治書院
- 新野直哉 (2011) 『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』 ひつじ書房
- 新野直哉 (2013) 「学界時評 国語」『アナホリッシュ国文学』2：186-187 響文社
- 新野直哉 (2014) 「『平成二十三年度国語に関する世論調査』をめぐる新聞報道」『言語文化研究』13：35-45 静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会
- 新野直哉 (2020) 『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』 ひつじ書房
- 早川俊章 (2013) 「『国語に関する世論調査』が果たす役割」『文化庁月報』532 https://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou_geppou/2013_01/special_01/special_01.html
- 文化庁国語課 (2015) 『文化庁国語課の勘違いしやすい日本語』 幻冬舎
- 増井元 (2013) 『辞書の仕事』 岩波書店
- 町田互 (2022) 「令和2年度『国語に関する世論調査』の結果からみる国語科の課題—生活の変化とコミュニケーション」『教育科学国語教育』64(3)：84-87 明治図書
- 町田互 (2023) 「令和3年度『国語に関する世論調査』の結果からみる国語科の課題—言葉に関する課題とローマ字表記」『教育科学国語教育』65(3)：84-87 明治図書
- 森篤嗣 (2014) 「『国語に関する世論調査』は『国語に関する世論操作』になっていないか」『教育科学国語教育』56(9)：99 明治図書
- 山田敏弘 (2013) 『その一言が余計です。—日本語の「正しさ」を問う』 筑摩書房
- 山田敏弘 (2021) 「授受表現の文法的逸脱表現」金澤裕之・川端元子・森篤嗣編『日本語の乱れか変化か—これまでの日本語、これからの日本語』21-46 ひつじ書房

付記

本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」の研究成果の一部である。

ENGLISH SUMMARY

**Norm consciousness surrounding the survey on the “meanings and ways of saying idioms”
in the “Survey of Public Opinion on the Japanese Language”
— Focusing on changes in the researcher’s consciousness**

NIINO Naoya

This paper examines changes in the Japanese Language Division’s awareness of language norms regarding the intention and results of the survey on “the meanings and ways of saying idioms” in the “Survey of Public Opinion on the Japanese Language” conducted every year by the Japanese Language Division of the Agency for Cultural Affairs. The discussion focused on surveys from 2010 to 2021. The Japanese Language Division’s articles reporting on this survey consistently maintain that the issue is whether the meaning or way of saying it is “original or unoriginal,” not “right or wrong.” Furthermore, recently there has been a growing awareness of the need to avoid making assertions that “this is the original meaning/way of saying /is not the

original meaning/way of saying.” Recently, people related to the Japanese language Division have been expressing their dissatisfaction and discomfort with the “conversion” of “original/unoriginal” → “right/wrong” in the media, and what is “original”. They are emphasizing that while it is desirable for people to know about it, there is no intention to turn people away from it. This is thought to be in response to criticism from language researchers as “manipulating public opinion” and “skillful promotion of correction,” that when research results are “converted” and reported in the media, the “original” meanings and ways of saying them become more powerful.

Key Words: “Survey of Public Opinion on the Japanese Language”, “the meanings and ways of saying idioms”, Japanese Language Division of the Agency for Cultural Affairs, norm consciousness, “original”